色麻古墳群

―県北の大規模群集墳―

色麻古墳群（しかまこふんぐん）は古代陸奥国が設置された7世紀中頃から陸奥国府が多賀城に移される8世紀前半にかけて、鳴瀬川中流域に造られています。直径10m前後の小円墳からなる推計500基の大規模な群集墳です。『続日本紀』には、霊亀元（715）年に陸奥国北辺に黒川以北十郡（黒川・志田・賀美・色麻・玉造・長岡・富田・新田・小田・牡鹿郡）が移民によって建郡されたとする記録が残されており、色麻古墳群はおおむねその前後の時期に相当します。陸奥国北辺の古墳文化から仏教文化への過渡的な様相もよく表しています。

ここでは色麻古墳群の発掘調査資料とともに周辺の官衙遺跡の資料をご紹介いたします。

色麻古墳群の位置と同時代の主要遺跡